



Absolute-MIX

Tomoko Yazawa Solo

矢沢朋子・ソロ (Piano+Synthesizer) with VJ Masaru

2001年9月7日(金)

18:30開場 19:00開演

東京文化会館小ホール

デヴィッド・ラングは1987年以来、仲間の作曲家ジュリア・ウォルフ、マイケル・ゴードンとともに「バング・オン・ア・キャン」という現代音楽のフェスティヴァルをニューヨークで開いている。リンカーン・センターで開かれた第10回のフェスティヴァルを見に行ったとき、入り口で手の甲にスタンプを押してもらい（午後2時半から10時半までの開演中、このスタンプを見せれば出入り自由）、ホールではTシャツにパミューダ・ショーツでステージに上がっている作曲家たちを目にし、これは場所に似合わずダウンタウン的なやり方だと思ったものだ。途中で近くのチャイニーズ・レストランで食事をしていると、スタンプを押されたご同類がぞろぞろと入ってきて、食べ終わるとまたホールへ戻っていった。

コロンビア大学やリンカーン・センターがあるアップタウン（セントラルパークの南端から北の方）は大学にポストを持つエスタブリッシュメントが支配し、ヴィレッジやソーホーのあるダウンタウン（14丁目から南）は本流をはずれた実験派、ミニマル派とその流れを汲む作曲家たちの根城というのがニューヨークの常識になっている。アップタウンの総帥がミルトン・バビットであり、ダウンタウンのスーパースターがスティーヴ・ライヒやフィリップ・グラスである。ラングたちが第1回のフェスティヴァル（12時間のマラソン公演）をソーホーのギャラリーで立ち上げたとき、一番の目的がアップタウンとダウンタウンの垣根を取っ払うことだったというから、両者の対立がいかに根深かったは推して知るべし。アップタウンとダウンタウンが水と油のように反発していたのは昔の話になったかもしれないが、ライブハウスなどで行われるカジュアルな雰囲気のコンサート、ポピュラー音楽の影響を受けたコンセプト、モダンダンスや演劇、映像の分野とのコラボレーションのひんぱんさは今でもダウンタウンの特徴だ。

日本の音楽界には、ニューヨークのダウンタウン音楽シーンに相当するものがはっきりとは見当たらないが、演奏家個人の立場でそれに近いことをやっているのが、数年前からニューヨークでも精力的な活動を始めた矢沢朋子だ。ライブハウスで演奏したり、映像との共同作業を積極的に進めたりといった動きにもその一端がうかがえるし、もちろんニューヨークのダウンタウン・コンポーザーや彼らと近いスタンスの作曲家による作品をたくさん演奏している。きょうのコンサートでは、ヒグマ春夫と、エリック・ヴェンガーのヴィデオ・ワークとコラボレートし、VJマサルと「共にプレイ」する。シンセサイザーのサウンド・デザインも自ら行った。「どんな音色がいいかと考えるときはファッション・コーディネーターの気分」と服にはウルサルサイズはいっている。

ラングの作品は2曲演奏される。どちらも「メモリー・ピーセズ」という曲集からとられたもので、それぞれ知人の死を悼んで書かれている。<ケージ>はご存知ジョン・ケージに捧げられている。もう一曲の<グラインド>で追悼されているのは、ラングがイエール大学で教えを受けたジェイコブ・ブラックマン。1972年にオーケストラ曲の「ウインドウズ」でピュリツァー賞を受けた作曲家だ。ラングはなぜこのような曲集をまとめたのだろう。楽譜の前書きでは自らこんな内容のことを述べている—亡くなった人に関する記憶は、悲しいかな、時とともに薄らいでいってしまう。思い出を曲にしておけば、いくらかでも長くその人のことを覚えていられるのではないか。

平石博一の<ファー・アウェイ・フロム・ヒア>も矢沢の依頼で新しく生まれ変わった曲。オリジナルは徳田ガンの舞踏公演のために作られた音楽の一部だった。後にCD化されたものを矢沢が耳にし、ピアノソロを加えたヴァージョンにできないかと提案した。シンセサウンドによる原曲をベースに平石がピアノパートの候補を作り、矢沢が手直しを加えた。タイトルには「目的地は遠いが、だからこそ力強く生きなければならない」という思いが込められている。<ファイアーノ>も、オリジナルはコンピューター打ち込みの作品だった。矢沢の提案によってピアノパートが付け加えられ、益田トッシュのドラムパート・プログラミングによる新しいヴァージョンが出来上がった。

平石は1970年代の初めから一貫してミニマル・ミュージック的な世界を追求している。オーケストラ、室内楽、独奏曲まで広い範囲の曲を書き、クロノス・カルテットから2曲の委嘱を受けている。近年はコンピューターによる打ち込み系の音楽が主になっている。

ロックの巨人フランク・ザッパ（1993没）が書いたシリアルな作品<ルース・イズ・スリーピング>も実在の人物と関係がある。その人とはザッパのバンドメンバーだったパーカッション奏者ルース・アンダーウッド。ザッパがリハーサルではほかのメンバーに指示を与えていたときなど、彼女はよくマリンバの下にもぐりこみ、丸くなって眠り込んでしまったらしい。アンサンブル・モデルンによるレコーディングでは二人のピアニストによって演奏されているが、チャレンジ好きの矢沢はこれを一人で弾くことにした。ザッパによると、一人用のヴァージョンは“very, very, very difficult”なのだという。

The musical score for "Ruth Is Sleeping" is shown on two staves. The top staff is labeled "Primo" and the bottom staff is labeled "Secondo". Both staves use treble clef and common time. The Primo staff has a tempo marking of "ca. 144". The Secondo staff also has a tempo marking of "ca. 144". There are several dynamic markings, including "p" (piano), "pp" (pianissimo), and "f" (forte). A instruction "sempre legato / Pedal ad lib." is written above the staves. The score includes various rests and note heads, indicating a complex rhythmic pattern. The title "RUTH IS SLEEPING" is partially visible on the right side of the page.

スコット・ジョンソンのアルバム「ロック、ペイパー、シザーズ」が1996年に発売されたとき、筆者はニューヨークに住んでいた。朝はニューヨーク・タイムズを読むことから始まる。いつものようにアート&レジャーの欄から見ていくと、垂らした前髪の奥から考え深げに前方を見つめるジョンソンの巨大な顔写真が目に飛び込んできた。「若い作曲家たちは<主義>を避け、ポップを見習う」という記事だった。「アンプリファイされたバンドのために作曲し、自分自身がそこでエレキギターを弾いている」という説明に好奇心をくすぐられ、CDショップに足を運ぶと、そのアルバムはすぐに見つかった。ブックレットの表紙写真もまたまた顔の大写しで、クールな表情を装うジョンソンは右斜め前方に鋭いまなざしを投げかけているのだった。

CDをかけると、この男ってもしかして見掛け倒しではないのかという心配は一瞬で吹き飛んだ。サンプリングされた言葉のリズミカルな扱い、ピアノ、シンセサイザー、エレキギター、ヴァイオリン、チェロによる緊密なサウンドは無類のおもしろさ。ロックの影響がどうだとかこうだとかいうより、ロックそのものにきこえた。だから、ピアノソロのための曲があると知ったときは意外な気がした。持ち味のスピーディーで力強いフレーズ、メリハリの効いたリズム感をピアノにどう持ち込むのか。エレキギターなしでもロック・スピリットを感じさせることができるのだろうか。矢沢が1999年5月19日にニューヨークで世界初演した<ジェット・ラグ・ラウンジ>はそのような思い込みを見事にはぐらかしてくれた作品である。なによりタイトルが多くを語っている。ここにはジェット・ラグ(時差ボケ)の中途半端で浮遊した感覚があり、ホテルのカクテル・ラウンジあたりで演奏されるイージー・リスニング的なジャズのけだるさにつながる感覚がある。ロックを期待してはいけなかった。それでも、身の周りにある日常的な音に注目し、それを職人芸的な細かさで自分の音楽につむぎ上げていくという手法は、彼の従来の作品と共通しているともいえる。<メイバー・ユー>の方は録音された声(最初は聴き取りづらいが、もちろん「メイバー・ユー」といっている)を含む。矢沢による世界初演は2001年3月20、22、24日の3日間、ニューヨークの「アメリカン・オリジナル・シリーズ」で行われた。このときの編成はピアノ、ヴァイオリン、チェロ、スコット自身のギターだったが、今回はピアノとエレクトロニクスで演奏される。

ジョンソンは1999年度クーセヴィツキー賞を受賞しているほか、近年はクロノス・カルテットから曲を委嘱されたり、リンカーン・センターのコンサートやBAM(ブルックリン・アカデミー・オブ・ミュージック)のネクスト・ウェイヴ・フェスティヴァルに参加するなど、いよいよアメリカ音楽界の最前線に出てきたという印象が強い。

矢沢は作曲家に新作を委嘱するだけでなく、彼らと共同作業で新しいレパートリーを作りだすことにも熱心だ。たとえば、菅谷昌弘の<ジャイレーション>がその一例にあげられる。もともとは山崎広太のダンス作品のために書かれたものだったが、公演を見に行った矢沢が曲を気に入り、その中のあるフレーズを取り出してピアノとテープのための音楽に再構成することを依頼した。矢沢によるリミックスが加わっているため、二人の共作としてクレジットされている。タイトルは4サイクルエンジンの回転ムラからの連想という。菅谷は

1987年から1999年までパフォーマンス・グループ「パパ・タラフマラ」の音楽を担当したのをはじめ、美術家、映像作家、ライティング・アーティスト、ダンサーらとのコラボレーションが多い。また、CMやテレビドラマの音楽作曲、ギターデュオ「ゴンチチ」の編曲も手がけている。

カール・ストーンはもっぱらエレクトロ-アコースティックとコンピューターのための作曲に専念しているが、おおげさな効果で人を脅かす趣味はないらしく、ゆっくりと変化していく音楽のありかたといい、音色といい、ナチュラルで親しみやすい。ストーン自身のことばによると、矢沢の委嘱で書かれた<トラバゾーラ>は「一人のピアニストのための機能上のデュエット」。18世紀音楽の小品をもとにピッチやリズムをさまざまに変化させていく作品で、ピアニストはこれを「エレクトロニックなパートナー」との音楽的な掛け合いで演じることになる。タイトルはメキシコの地名からとられたーと最初は聞いていたのだが、実はイースト・ロサンゼルにあるメキシカン・レストランの名前らしい。1972年以来、彼はいつも自分の作品をレストランの名前にちなんでつけてきたという。そういえば1992年に発表された同名アルバムに収録されている“MOM'S”はバーベキュー・レストラン(店の写真がブックレットの表紙になっている)の名前だし、東京の街できこえるさまざまな音を素材にした“KAMIYA BAR”という作品もあった。ストーンは自分のホームページにレストランのレビューをたくさん載せているが、いまのところバゾーラ・グリルの評はアップされていないようである。

Many thanks to Ms. Yazawa for her request, and also to Masahiro Sugaya for his help in preparing the electronics and score. —Carl Stone

北カリフォルニア生まれのキャロリン・ヤーネルはサンフランシスコ音楽院とイエール大学で学んだほか、フルブライト基金からの給費を受けてなぜかアイスランドに留学している。2000年度ローマ賞も受賞するなど立派なキャリアを持っているが、お茶目過ぎるバイオ(経歴)に最も詳しく書かれているのは趣味の岩石収集についてだ。「プラスティックのスプーンをくわえて生まれてきた」と自称する苦労人(?)。「まったくうな職業に就いたことはなく、作曲委嘱、権威ある賞と奨学基金、ピアノの生徒、コンピューターを用いた製版、絵画作品の売り上げ、それに幸運のおかげで生き延びてきました」

<ザ・セイム・スカイ>はピアノソロとエレクトロニクス、ヴィデオ(エリック・ヴェンガー)のために書かれた作品。自らの作品解説によると、タイトルはヴェニスの邸宅を舞台とした映画を見て感じたことに由来している。「大理石の階段の踊り場にテーブルがひとつ置かれていました。その上には透明な花瓶が載っていて、白い大きな花でいっぱいでした。そのすぐ脇には窓がありました。私は、こんなところに住むことができたらいいだろうなあ、いつも珍しい花に囲まれていらいいだうなあと思って見ていました。そのとき画面が切り替わりました。そしてたとえようもなく美しい空が映し出されました。それで私は気がついたんです。この人生で何を手にしているかに關係なく、わたしたちはみんな同じ空を共有しているのだということに」

Program

1 Cage/ケージ
David Lang/デヴィッド・ラング
From Memory Pieces for piano
sound design : Tomoko Yazawa

2 Far Away From Here/ファー・アウェイ・フロム・ヒアー
Hirokazu Hiraishi/Tomoko Yazawa/平石博一/矢沢朋子
for piano & electronics (by synthesizer)
video work by Haruo Higuma

3 Ruth Is Sleeping/ルース・イズ・スリーピング
Frank Zappa/フランク・ザッパ
for piano two or four hands, or two piano

4 Jet Lag Lounge/ジェット・ラグ・ラウンジ
Scott Johnson/スコット・ジョンソン
for piano

5 Grind/グラインド
David Lang/デヴィッド・ラング
From Memory Pieces for piano
sound design: Tomoko Yazawa

6 Fire/ファイア
Hirokazu Hiraishi/平石博一
for piano & electronics

Intermission

7 Maybe You/メイビー・ユー～日本初演～
Scott Johnson/スコット・ジョンソン
for violin, cello, electric guitar, piano & electronics
(by piano & electronics version)

8 Gyration/ジャイレーション
Masahiro Sugaya/Tomoko Yazawa/菅谷昌弘/矢沢朋子
for piano & electronics

9 Tlapazola/トラパゾーラ～World Premier～委嘱新作世界初演～
Carl Stone/カール・ストーン
for piano & electronics

10 The Same Sky/ザ・セイム・スカイ～日本初演～
Carolyn Yarnell/キャロリン・ヤーネル
for piano, video & electronics
video work by Eric Wenger

ビデオ・ワークス：
ヒグマ春夫
エリック・ヴェンガー (Eric Wenger)
VJ マサル

音響：サウンドクラフト
映像：Tun Entertainment
映像技術：尾崎 亘
ライティング：岩品武顕 with Friends
調律：倉田尚彦（松尾楽器）

助成：野村国際文化財団
芸術文化振興基金
ローランド芸術文化振興財団
ローム・ミュージック・ファウンデーション

協賛：龜有信用金庫、アテンション
@ttention
協力：NADiff, TUN Entertainment
後援：日本アルバン・ベルク協会

制作協力：CONVERSATION

M
ecenat 企業メセナ協議会認定

600-1834